様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ２３０３９

研究課題名（和文）ヴァイマル期E・ユンガーの黙示録の思想ー保守革命の「政治神学」の言説を背景として

研究課題名（英文）E. Juenger's thought of apocalypse in the weimar period: Against the background of the discourse of "political theology" of the conservative revolution

研究代表者
稲葉　瑛志（Inaba, Eiji）

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：１０８４８９８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：ヴァイマル共和国の急進右派の思想「保守革命」における黙示録の思想を明らかにすることが本研究の目的であった。とりわけ作家エルンスト・ユンガーの「政治神学」の言説に焦点を当て、このテーマを考察した。「政治神学」は、この思想における政治と宗教とを切り結ぶ重要な接点であり、その考察はしたがって彼らの思考法や歴史思想を解明する鍵でもある。本研究ではユンガーの政治文書（1919-1933）と未発表の書簡からこの言説を分析し、その分析結果を他の保守革命の思想家たちの思想と比較考察することを通じて、この時代の思想的布置を再構成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、ヴァイマル共和国の急進右派の思想「保守革命」における政治と宗教を切り結ぶ問題を解明し、この時代の思想を文学・政治思想・宗教思想など領域横断的に考察した点にある。この研究を通じて、従来見落とされてきた「保守革命」の黙示録の思想の内実に迫ることができた。また、この観点から考察することで、ナチズムと同一視されてきた「保守革命」の「ナショナリズム」の独自性を明らかにし、同時代の思想的布置も再構成した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to clarify the thought of apocalypse of the "conservative revolution" in Weimar Republic. In particular, this theme was examined by focusing on the discourse of "political theology" of the writer Ernst Juenger. "Political theology" is an important point of contact between politics and religion in this thought, and its examination is therefore a key to elucidating their way of thinking and historical thought. This research analyzes this discourse from Juenger's political documents (1919-1933) and unpublished letters, and reconstructs the philosophical constellation of this period through a comparative study of the results of this analysis with the thought of other thinkers of the "conservative revolution".

研究分野：ドイツ文学

キーワード：保守革命　エルンスト・ユンガー　政治神学　黙示録　宗教思想　政治思想　ナチズム　保守主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（1）歴史学者デートレフ・ポイカートは、20 世紀初頭のヴァイマル期（1918-1933）を、急激な近代化によって工業や産業などの社会的領域だけでなく、生活や文化などの文化的領域も革新された時代として捉えた。その上で、社会の合理化や快適化などの近代化の進歩的現象だけでなく、それに随伴したあらゆる危機的現象も同時にもたらされた時代として特徴づけた。わずか 14 年で近代化のあらゆる可能性を試し、急激な近代化の必然的な結果である光と闇を同時にうつしだしたこの時代は、「古典的近代(klassische Moderne)」の時代として概念化された。[Peukert, 1987]

こうした「古典的近代」の危機的状況に応答した文学や思想は、右派・左派ともに過激な様相を帯びる。その中でも特に、ナチズムとは近い思想圏域にありながらもそれとは一線を画する主張を文学や思想において展開したのが「保守革命（konservative Revolution)」である。思想史家アルミン・モーラーの先駆的研究『ドイツにおける保守革命（Die konservative Revolution in Deutschland)』(1950）によると、保守革命には、オスヴァルト・シュペングラー、アルトゥール・メラー・ファン・デン・ブルック、カール・シュミットそしてエルンスト・ユンガーなど多様な作家や思想家たちが含まれる。彼らは第一次世界大戦の敗戦とドイツ革命による帝政の崩壊後、この戦争を根源的な体験として、反自由主義・反ヴェルサイユ体制・反ヴァイマル共和国の主張を掲げた。[Mohler, 1950]保守革命研究の方向性を決定づけた研究書としてシュテファン・ブロイアーの『保守革命の解剖学（Anatomie der konservativen Revolution)』(1993）が挙げられるが、この研究以降、保守革命を反近代の思想としてではなく、上述の「古典的近代の危機」の応答という意味合いをもつ、「オルタナティヴな近代」を求めた思想という観点から論じられるようになった。[Breuer, 1993]

（2）以上の研究史を背景として、思想史研究においては今日に至るまで多様な保守革命像が描き出されてきた。また、文学研究の分野においても保守革命の作家の近代性に着目した研究が論じられるようになった。とりわけ保守革命の代表的な作家エルンスト・ユンガーについては、彼の技術論を中心に、近年著しい研究の進展がみられる。しかしながら、上述のように保守革命研究もユンガー研究も、彼らの近代性の理解を出発点として議論が展開されるため、宗教性の問題が主眼に置かれることは少ない。それどころかモーラーの論に代表されるように、保守革命をニーチェの歴史観を受け継いだ「弟子」とみなし、反キリスト教的思想と捉える見解もあるが、これらは正確性に欠けていると言わざるを得ない。

ところで、1924-25 年以降に本格的に執筆開始されたユンガーの政治論文に目をむけると、第一次世界大戦の意味と政治の変革についての言説の中に、『聖書』の「ヨハネの黙示録」にみられる、根源的な暴力を喚起させる宗教的メタファーやアナロジーが混在していることがわかる。このことから、彼の現実政治への取り組みと宗教への関心は同時進行であったことが指摘できる。そして、政治と宗教が絡み合うこの変革の思想は、カール・シュミットやアルトゥール・メラー・ファン・デン・ブルックをはじめとする保守革命の思想の一断面を特徴づけた「政治神学」の言説との共通性が確認できる。さらに、彼らの思考回路を西洋思想史に照らしてみると、自由の完成と世界の完成を、現世の歴史としての未来に生起する出来事として歴史内在的に理解したフィオーレのヨアキムの黙示録的終末論を応用したドイツ・ナショナリストからの回答であることがわかる。したがって従来の研究における、反キリスト教的な保守革命像およびユンガー像は、一面的な評価であるだけでなく、西洋思想の歴史的展開さえも見落とす危険がある。

２．研究の目的

これらの先行研究の動向と問題点を踏まえた上で、本研究の目的は、保守革命において政治と宗教が交わる「政治神学」の内的論理を解明し、ユンガーの思想の新たな側面を照らし出すことであった。具体的には、この研究を通じて以下の二点を解明することが目的である。(1)「宗教リバイバル」と言われるヴァイマル期における右派の政治と宗教との接点を、保守革命の思想家に共通する「政治神学」の言説から解き明かすこと。(2）反キリスト教的思想とみなされてきた保守革命およびユンガーの思想を、黙示録的終末論の系譜に位置付けること。

以上の二点の研究目的を達成した先には、ヨアキムの黙示録的終末論の 20 世紀前半におけるオルタナティブな回答を、共産主義の「第三インターナショナル」やナチスの「第三帝国」にみる見解に対して、保守革命という両者の間に位置する思想に発見することができる。

３．研究の方法

本研究は、ユンガーの初期の小説やエッセイだけでなく、宗教性がつけ加えられた 1924-25 年以降の政治文書の分析も行った。ユンガーが保守革命の思想家たちに宛てた未発表の書簡をドイツのマールバッハのドイツ文学資料館（DLA）で収集し、それらの資料にある「政治神学」的言説の影響関係を分析することを本研究の補助線とした。具体的には、140 本を超えるユンガーの政治文書『政治的ジャーナリズム（Politische Publizistik)』(2013）を通読し、彼の政治的・

宗教的発言の全体像を把握することを試みた。その後、一次史料である未発表の書簡の精査を実施し、ユンガーと保守革命の思想家たちとの間で交わされた「政治神学」を比較考察した。

４．研究成果

（1）本研究はまず、未だ十分に整理されたとは言い難い、ヴァイマル期の保守革命の思想家たちの政治と宗教をめぐる言説を整理することから開始した。

保守革命はその概念からしてまさに近代の両義性を表現した政治思想であった。この概念の曖昧さについては上記のブロイアーの研究ですでに指摘されており、ブロイアーはそれゆえこの概念を放棄する。しかし、保守革命の思想が保守主義とどれほど断絶があるのか、あるいは、保守主義の系譜に位置付けられるかどうかについては、保守主義の心性についての精神史的考察の後に判断されるべきである。

ドイツの保守主義は、それ自体が成立段階から近代的現象でありながらも、近代の土壌において合理主義や自由主義などの近代精神に対してその都度徹底抗戦をしなければならいという特有のジレンマを抱え込んでいた。それゆえ、ドイツ保守主義の精神は、合理主義による批判とそれに対する保守を同時に生み出す弁証法によって形成されてきた。[Greiffenhagen, 1971]

「古典的近代の時代」において保守主義は、伝統との断絶、正統性の崩壊、文化的連続体の危機などが重なり、保持すべきものすべてを喪失した。その結果、保守主義は革命的態度をとるようになったのである。この時代に出現した保守革命の思想家たちの言説に目を向けると、彼らは保守主義の最終段階であることを自覚しながら近代化に応答したことがわかる。彼らの応答が従来の保守主義と決定的に異なるのは、彼らが現状の維持ではなく、未来に保持すべきものを創出するという方向へと転換した点である。精神的態度のこうした転換の根底には、共通する歴史思想を見つけることができる。それはあらゆる歴史的・文化的「断絶」を「創出」へと転換する黙示録的歴史思想である。

本研究ではシュペングラーとメラー・ファン・デン・ブルックなどを分析対象として取り上げ、その黙示録の思想が彼らの政治的態度とどのように結びつくのかを考察した。とりわけ注目したのは、彼らの「ライヒ」論である。彼らはドイツ民族とヨーロッパを分ける国民国家に対して、それを統合する「ライヒ」の理念を追求した。その理想は彼らのナショナリズムに革命的政治性を付与するものでもあった。保守革命の思想家たちは、黙示録文化のナショナリズム化という言説の中で、19 世紀型国民国家を超える政治的理念を「ライヒ」に見ようとしたのである。

以上の研究の内容は、2020 年度に雑誌論文の形で発表された。(「5. 主な発表論文等」の[雑誌論文]「保守革命と黙示録――「没落」の不安と「ライヒ」の勃興」)

（2）このように保守革命の思想史的背景を整理した上で、本研究はエルンスト・ユンガーの初期作品における「政治神学」を考察した。

ユンガーもまた、他の保守革命の思想家たちと同様に黙示録的歴史思想を持ちながらドイツの政治を考察した一人であった。彼はヴァイマル期に 140 本を超える政治文書を発表しており、そこから彼の政治的思考と宗教的思考の交わる思想が確認できる。1920 年代の彼の政治論の主題は、国家の危機の問題であった。彼は暴力の独占に失敗したヴァイマル共和国に生きる人々の実存的不安と近代化の過程で失われた宗教的な繋がりを取り戻そうとする人々の願望を察知し、かくいう政治的・宗教的願望を実現することのできる「新しいナショナリズム」を模索した。

ユンガーは自身の政治文書において「ナショナリズム」を「信仰」の問題として理解した。一人の指導者を頂点とする位階秩序に基づく統治を理想に掲げる時、彼の「ナショナリズム」の言説には同時代のカール・シュミットを始めとする保守革命の「政治神学」の影響があることが従来の研究でも指摘されてきた。[Trawny, 2009] しかしながら、ユンガーはシュミットのように政治的支配を裏付けるための「政治神学」論を理論的に考察したわけではなかった。いかにユンガーが自身の「ユンガー・クライス（Jünger-Kreis)」形成に「再現前（Repräsentation)」という「政治神学」の概念を援用して考察していたとしても、それは、宗教的服従を前提とする政治理論とはやはり位相が異なる。したがって本研究では、主題を「ユンガーの政治神学」ではなく、「ユンガーと政治神学」として設定し直すことによって、双方の共通項と差異を分析し、彼の求めた「ナショナリズム」の理念を考察した。とりわけ注目したのは、ユンガーの革命論である。彼の革命の言説を、初期の政治論文から以前にドイツ文学資料館で入手した未発表の書簡まで広く集め、分析した。

ユンガーは同時代の「青年イデオロギー」の影響を受けながら、終末論的暴力が歴史に介在する可能性を初期の革命論から 1929 年の「「ナショナリズム」とナショナリズム」の論文まで一貫して追求していた。これを試金石として、ユンガーとナチズムの「ナショナリズム」の相違を示すことができた。ユンガーの政治論文や未発表の書簡からロシア・アナーキズムへの傾倒を分析し、その語調がメシアニズムに影響を受けていることも確認した。彼の求めた「新しいナショナリズム」の革命とは、現存の秩序を無化する運動の中に新しい何かを迎えるものであり、歴史的過程を切断する助産的暴力であった。その意味において、彼の「新しいナショナリズム」とは、秩序思考の政治神学とは異なるものであり、むしろ「右からの革命」として理解すべきものであった。以上の研究の内容は、2019 年度に口頭発表の形で発表され、(「5. 主な発表論文等」の[学会発表]「エルンスト・ユンガーと政治神学――ヴァイマル期の政治神学を手がかりに」)その後、2020 年度に京都大学大学院人間・環境学研究科に提出された博士論文「「古典的近代」の「危機」とエルンスト・ユンガーの「詩的政治」」の第二章の形で発表された。

（3）本研究を遂行するためには、ユンガーがこうした黙示録的思考を抱くようになった思想史的背景も考察する必要があった。「古典的近代の時代」では社会的領域のみならず文化的領域においても「危機」は語られていた。すでに歴史学者 D・ポイカートは、上述の主著において「危機」の問題を取り上げていたが、彼の議論においては「危機」が実体として理解されており、とりわけ経済的危機が共和国の崩壊の原因として重視されていた。そのため、ヴァイマル共和国の中で人々が経験的次元で感じたはずであった「危機」の複雑性が単純化されてしまったのである。

本研究では、この問題点を踏まえた上で、歴史学者ラインハルト・コゼレックの「危機」に関する一連の研究を足掛かりにその概念的把握を開始した。コゼレックは、「危機」概念を「継続的危機」「またとない加速のプロセス」「最後の危機」という三つの意味内容に分類した。[Koselleck, 2006]とりわけ第三のモデルに見られるように、「危機」には通常語られるような否定的な内容だけでなく、ユートピア的契機も内包されていることがわかる。

こうした概念的把握をした上で、ヴァイマル共和国時代の「危機」を経済危機のような実体としてではなく、言説として捉え直すことを試みた。14 年というきわめて短い共和国の時代において「危機」をタイトルに掲げた文書が 370 本も発表されていた。そのことから「危機」はこの時代を最も特徴づけた言説の一つであったことが確認できる。コゼレックの指摘した第三の「危機」モデルはこの時代において、「ナショナリスティックなもの」「社会主義的なもの」「ヨーロッパ・インターナショナルなもの」「精神的・道徳的なもの」の四つの領域において確認され、ユートピア的契機を持つ「危機」の言説が急進右派から急進左派まで広まっていたことがわかる。[Graf, 2005]ユンガーの初期作品においても、第三の「危機」のモデルは、彼の歴史観、思考法、政治構想の中に読み取ることができる。これまでに得たユンガー研究の成果も参照しながら、彼の初期作品の分析を行った結果、彼は「危機」をある種の「好機」とみなしていたことが理解できた。「危機」の観察者ユンガーは、第一次世界大戦後に変貌した世界の様相を鋭敏に感受し、崩壊の兆候を「好機」と捉える思考法と黙示録的歴史観に基づき、来るべき世界像を美的表現に彫刻した。本研究では、エッセイ『冒険心（Das abenteuerliche Herz)』(1929）や『労働者（Der Arbeiter)』(1932）を分析対象として取り上げ、大都市の刺激による「危機」の知覚が、彼の黙示録的歴史観、「好機としての失敗」の思考法、「技術の完成」の秩序構想に密接な影響を及ぼしていることを明らかにした。以上の研究の内容は、2022 年度に雑誌論文の形で発表された。(「5. 主な発表論文等」の[雑誌論文]「エルンスト・ユンガーの初期作品と「危機」の言説」)

以上の三つが本研究の成果であるが、研究開始時点で掲げていた研究目的を達成する十分な結果であったとはいえない。なぜならユンガーの政治と宗教についての発言はまだ本国のドイツ文学資料館に残存しており、それらの一次資料を全て精査するまでは十分な実証研究ができたとはいえないからである。しかしながら、保守革命における政治と宗教の接続点を探るという本研究の全体像は捉えられただけでなく、今後の具体的な展望も得られたという点では、大きな成果があったと評価し得る。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 稲葉瑛志	４．巻 39
２．論文標題 エルンスト・ユンガーの初期作品と「危機」の言説	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人文論叢	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 稲葉 瑛志	４．巻 160
２．論文標題 作者と権威	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ドイツ文学	６．最初と最後の頁 78～92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11282/jgg.160.0_78	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 稲葉瑛志	４．巻 23
２．論文標題 保守革命と黙示録――「没落」の不安と「ライヒ」の勃興	５．発行年 2020年
３．雑誌名 社会システム研究	６．最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/250394	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 稲葉瑛志
２．発表標題 エルンスト・ユンガーと政治神学――ヴァイマル期の政治神学を手がかりに
３．学会等名 日本ヘルダー学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関